

# 高崎山城と柞原宮

夏の歴史探訪会



別府史談会

今年はだらだらした長梅雨で、正式な梅雨明け宣言も聞かれないまま、いつのまにか秋風を感じるような、夏であった。そのため、夏の歴史探訪会も延びのびになり盆が明けて、やつと八月二十三日に催すことになった。

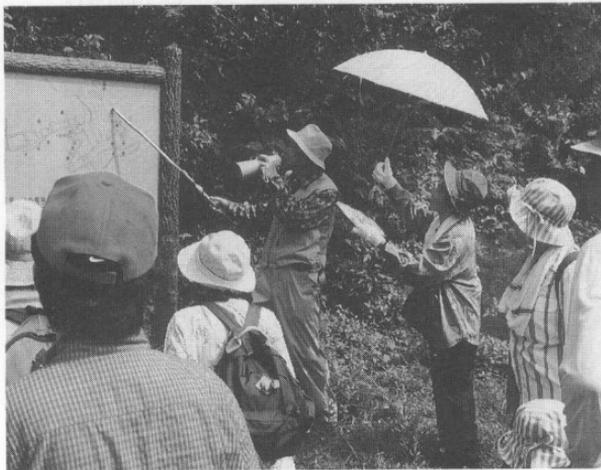
バスの便のない、徒歩ではちょっと遠すぎる銭瓶峠の集落地だったが、さいわい晴天に恵まれて、女性七人を含む三十一人も参加者があり、皆さんが敲くカンカン石の音もひときわ快く聞こえた。

東京からはるばる参加された吉弘尚正氏も一緒に記念撮影して、乗用車二十台のキャラバン隊で、昔の「城ノ腰道」の側にある登山口駐車場に移動した。

下見の時に悩まされたブトも少なく、予定どおり十時すぎに一列になって登山を開始した。

遠くから眺めるとかなり切り立って見えるが、大分市が登山道を整備したので緩やかな坂道を、たいした汗もかかずに登ることができた。

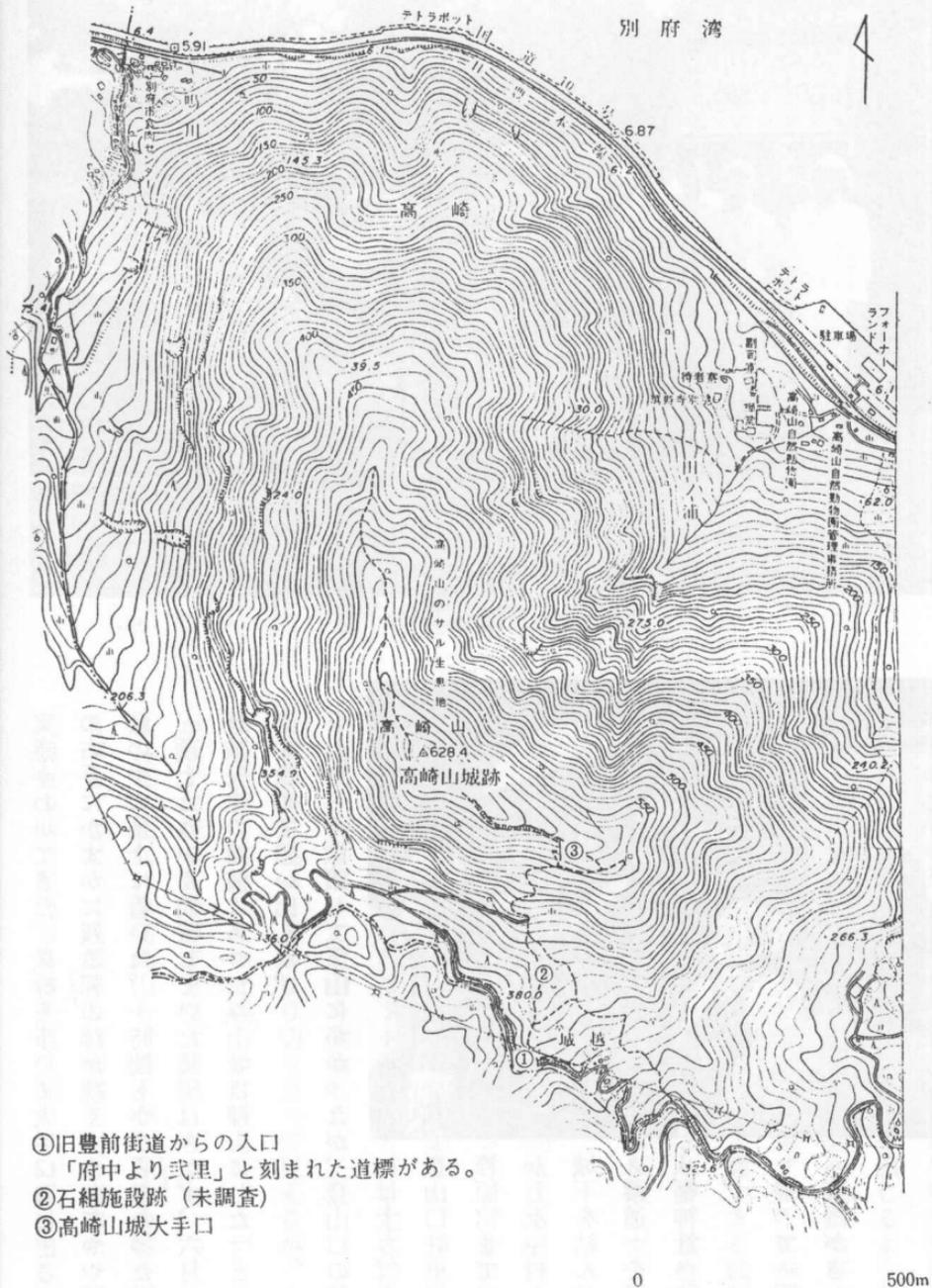
日ごろ見なれた高崎山も、道すがら<sup>たてぼり</sup>堅堀の跡を通るころから、しだいに山城らしい様相を呈してきた。途中の説明板の前で矢島さんの説明を聞いているうちに城郭の



実感がわいてきた。稜線を歩いて大手口跡に出ると、道の右手にかすかに残る郭の跡が続く。やがてやや開けた藪の中の頂上に着いた。一時間もかからなかった。

頂上とはいえ期待していた眺望はきかず、六月に三重野誠先生の講演にあつた「山城は裸山にした」というお話を改めて思い出した。

しばらく散策して下山にかかったが、登山口の駐車場には十五分足らず。登山口駐車場から柞原宮までは、むかし浜脇村と府内城下を結んだ「城ノ腰道」を通じて八幡神社へ移動した。帰って一服したら豪雨がきた。



- ①旧豊前街道からの入口  
「府中より武里」と刻まれた道標がある。
- ②石組施設跡 (未調査)
- ③高崎山城大手口

高崎山城の位置と大手への道

## 高崎山城

高崎山はトロイデ型の火山であるから、途中に平坦部がなく、標高六二八呎の山頂に達する

のは容易ではない。これが山城の不可欠の条件であり、また、周囲への見通しがよいことも必要である。この点について高崎山は「四極山」と云われるように四方を見極めることができる山容である。

## 山城の遺構

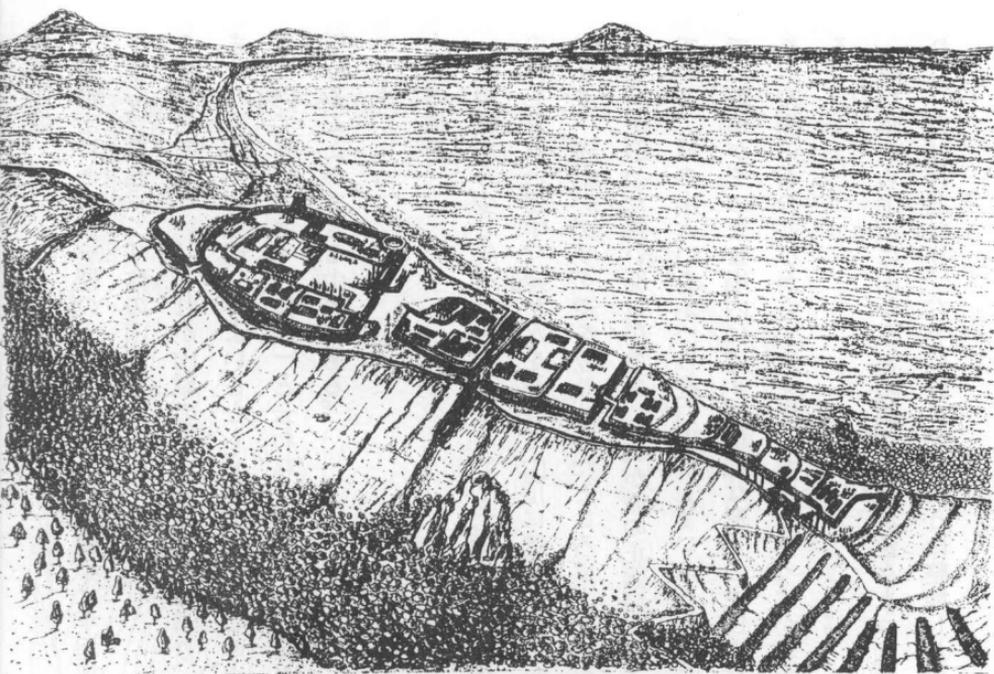
城の腰から少し先へ行き、「府中より二里」の道標横の林を登ると途中、姥ヶ水を通じて山頂に達することができる。途中ジグザグ道を登りつめたところに、左右から立石が迫った狭い部分がある。これが城の正面口になっている。城の出入口をふつう虎口と称しているが、ここでは坂道がそのまま場内に達する単純な形式の虎口となり、左側の石の並びから矢倉を構えていたようすがわかる。

虎口脇から山頂に向かうと両側に土塁が延々とつながり、一方は谷となり、右手に段々畑のように整地した平

坦地が連続し、しだいに通路より高くなってゆく。この人工的に造成した平坦部分の集まりが中世の城の本体であり郭（曲輪）とよばれるもので、尾根筋に十数段が認められる。

頂上に達する手前に尾根を横切るようにして走る掘切りがある。城内に侵入した攻め手のこれ以上の前進を阻むための施設であり、簡単な土橋が架けられたものとみられる。堀切を渡ると北側から斜面がせり出し、通路をしだいにすばめるようになっていく。敵を溜めておいて斜面の上方から矢を射かけるために地形を整えたものである。

これより十数呎進むと高崎山の頂上に到るが、平坦な山頂部が主郭（本丸）である。主郭は周囲に五角形に近い形に土塁をめぐらしており、東南の辺と北東の辺にそれぞれ開口部分がある。東南側が正面虎口になるが、土塁の線は極めて整っており特に正面から左側（西南部）に回り込むと土塁の高さはいっそう増して、裾のところからは空堀状の窪地が後方にかけて巡り、掘り上げた土を外周土塁に利用していることがわかる。



高崎山城の復原想定図

土塁に囲まれた主郭の内方はほぼ平坦面で奥の方に土壇状の高まりと、右手土塁の東北隅に狼煙台といわれる石組の井戸の形をした遺構、それと長径が十二石ほどの楕円形の窪がある。主郭内には城主がとどまる館や付属の施設が多数あったに違いないが、地表からの観察のみでは十分なこととはわからない。

土塁の切れ目を通り、北に行くと道は急下降となり、五〇石ほどで狭い平坦地に出る。この前方は崖となり、対岸には岩の露頭が屏風のように立っており、しかも尾根幅が極めて狭くなっている。自然地形を利用した城の北端である。大手虎口からここまでは約四五〇石の長さがある。

ここで、大手虎口に戻って城の南半部分を見ると、やはり虎口右手にも台状に整形した郭があり、この先端部分を横切って割石を積み上げた石塁が南縁沿いの通路からはじまり、北斜面に達している。この石塁は城内側からは約一石程度で目立たないが、南側から堅固な防塁となっており、ほぼ中央に木戸を開くが、通路の片側が城内方向に折れ込んでいるいわゆる喰違い虎口の形状がう

かがえる。なお、石塁の北半は北側斜面を下るが、この部分には空堀を伴っているようにみうけられる。

この石塁が高崎山城の南東側を仕切る施設である。しかし、なお石塁の外側にもさきにもみた台状を呈した地形が続いている。しかも二手に分かれており、一方は南にある建設省の反射板の方に延びており、もう一つは北東側に数段下降しながら連続している。これは石塁を守備点とするが、攻勢にあるときはここを陣として用い、劣勢になる場合には放棄して石塁内にこもるといふ城の延長部分であり主郭近くにあるものを「捨郭」、主郭から離れているものを「出郭」と称している。ちなみに、この出郭までを含めると城の全長は六〇〇仞にも及ぶことになる。高崎山城は極めて大きな部類に入ることにはまぢがない。

### 高崎山城の攻防

一、高崎山が記録にみえるのは、建久四年（一一九三）とも、同七年ともいわれる大友初代能直の豊後入国に当って、大野郡阿南郷の豊後武士阿南惟家が高崎山に

こもって阻止したという物語である。しかしこの裏付け史料はなく、能直の豊後入国はなかったとするの現時点での学界での定説となっている。しかし、大野九郎泰基が朝地町神角寺にこもって鎌倉勢と対決した事実からすれば能直入国阻止ではないにしても、高崎山での阻止行動はあったとする可能性は考えられる。

高崎山が城としての機能を持って史料に見えるようになるのは南北朝期になってからである。それも北朝に組した八代氏時代の代からである。

二、文和四年（一三五五）十月、南朝軍が豊後侵入したとき、氏時は上野丘で迎え撃ったが、懐良親王の率いる南朝軍に敗れて降伏した。この時は、まだ堅城高崎山城はまだ存在しなかったのであろうか。

三、三年後の延文三年（一三五八）、北朝方として行動をあらさまに取るようになった氏時に対して、懐良親王が再び狭間を襲い、高崎山城に迫った。両軍は高

崎山の西麓赤松で対戦するが、敗色濃い南朝軍は玖珠郡八丁辻を経て退却した。この時点で初めて大友軍が高崎山城に入城したことが確認される。

四、鎮西管領斯波氏経が、北朝軍の拠点になった高崎山城に入って北朝軍の指揮を執った。貞治元年（一三三六

二）大友氏時は、二万余騎をもって、南朝軍と筑前長原（粕屋町）で激突して敗れ、管領斯波氏経と高崎山城に逃げ込んだ。懐良親王以下は府内の万寿寺に本陣を置き岡・臼杵の北朝軍を攻めたが、高崎山は敬遠したようである。

五、京都に逃げ帰った鎮西管領斯波氏経に変わって、九州探題になった今川了俊が、応安四年七月高崎山城に入城した。菊池武光の子武政の南朝軍本隊が府内に侵入して、八月四日から十代親世・田原氏能が守る高崎山城の攻撃を開始した。翌五年正月二日までの間に百余度にわたって攻防が繰り返されたが決着はつかなかった。ところが、正月三日門司で北朝軍の援軍が九州

中央突破の布陣を敷き、南朝軍攻略を開始したので、これに対処するために南朝軍本隊は高崎山城をあとにした。

南北朝時代の高崎山城攻防は以上であるが、その後高崎山城は二度歴史に顔をだす。

六、嫡子と庶子の家督争いと家臣団の分裂は大友氏の抱える以前からの問題であった。永正十四年、二十代義鑑の家督相続に不満をもつ朽網親満党の武士が蜂起した。いったんは鎮圧されたが翌年（一五一八）八月、義長が逝去すると、朽網親満党は高崎山城に籠城して坑戦し赤松や鳴子口などで激戦が繰り返されたが、戦局は好転せず親満は筑前に逃亡した。

優勢な島津軍に領国を蹂躪され義統は高崎山城を放棄して豊前に敗走した。

七、天正十四年（一五八六）、豊後に侵入した島津と対

時した二十二代吉統（義統）は、秀吉の命に背き、戸次川原で島津軍を攻撃して大敗して敗走した。この時いったん高崎山城にたてこもったが、府内を捨てて豊前の竜王城に逃亡した。後の大友氏除国の一因となった事件である。この時父宗麟は臼杵城を、志賀親次は岡城を死守した。

#### 杵原八幡宮

大分市上八幡に鎮座 祭神は仲哀天皇・應神天皇・神功皇后 豊後国の一宮 旧国幣小社。俗に「いすはらはちまん」と称するが、古文書や古記録などは由原社・由原宮・由原八幡宮などあるので、「ゆすはら」と訓むべきであろう。また、賀来社・八幡大菩薩由原宮とも称された。

「由原八幡縁起」によれば、天長四年（八二七）五月五日延暦寺聖人金龜和尚が、宇佐八幡に参拝し、一千日の参籠の末、天長七年（八三〇）三月三日、豊後国大分郡神前郷杵原に、八幡宮の別宮造立の霊夢を得たとして六年後の承和三年（八三六）に豊後国司大江宇久が杵原

に八幡別宮を造立したという。

天台僧による八幡信仰は、宮と寺とを一体化した信仰で本地垂迹（仏が神として姿を現す）という考え方を生み出してくる。このように、神と仏が一体の信仰のことを「宮寺信仰」とよんでいる。

宇佐八幡宮は、豊後の国衙（国司の役所）に接近したかった。それは豊後に宇佐八幡宮の神領が多かったことと政治の中心に入っていくことであつた。

日本の神のなかでもっとも早く仏教に接近したのは八幡神であるが、杵原山上に神社を設け社殿を中心に上宮・下宮・今宮・神宮寺・弥勒寺などの堂宇院坊が混然一体となつた。これは全く新しい神社様式なのである。そしてその司祭者も、神主、宮司、禰宜ではなく宮師、別当という僧侶が祭祀官になるのである。これは、日本の八幡宮勧請の新しいあり方を示した。

（大分市史・大分の歴史）

（入江）